安徳天皇と居世（こせ）神社

平安時代末期、平清盛が全盛の時に次女の徳子（のちの建礼門院）が高倉天皇に嫁ぎ、生まれたのが安徳天皇（以後、安徳帝）です。

元暦二年（１１８５）、四国の屋島に続き、長門の壇ノ浦の戦いで平氏は源氏に敗北しました。『平家物語』には、わずか数え八歳（満六歳四か月）の安徳帝が母方の祖母・二位尼（平時子）に抱き上げられ、入水したと伝えられています。しかし、亡骸が発見されなかったことから、安徳帝は壇ノ浦で入水せず、平家の落人が安徳天皇をお守りして、地方に落ち延びたという説も残っています。

ここ松ヶ崎には、前述した欽明天皇の皇子が安徳帝だったとする説があります。厳しい源氏方の探索の目から逃れるため、あえて欽明天皇の皇子としたのではないか、という説です。薩摩国硫黄島（現在の鹿児島県三島村）を経て牛根麓に漂着し、十三歳で崩御され、居世神社に祀られたと伝えられています。

居世神社のある麓集落には、「東小路」「中小路」「宮崎小路」という、京風の地名が残されています。いつ頃からこのような呼び名がされるようになったかは定かではありませんが、この集落は安楽帝をお守りして落ち延びてきた平家の落人が住み着いた地といわれ、居世神社や入船城などは平家の落人と深いかかわりを持つといわれています。このような地名は鹿児島県では薩摩川内市にその一部の名所が残されているようですが、このように狭い街並みの中に統一的な呼び名の残されているところはあまりありません。

また、皇子がお着きになられた海岸を「オクツ崎（お付き崎の訛化か）」といい、居世神という小さな集落があり、そこに潜居されたという伝承があります。その周りの尾根には皇子が遊覧されたという「御所の尾」があり、居世神集落の東方には、皇子をお守りするため、法師等が後退に見張りをしていた「法師の立つ手」が設けられ、海からの船などを監視していたと伝えられています。

その後、七人の山伏の追跡のため、足のケガがもとで、わずか十三歳でお隠れになり、「陵（みささぎ）」に葬られたといわれています。皇子の荼毘（火葬）所である小烏（こがらす）神社には、石の祠が立っています。また、陵は今でも宮崎小路の奥に残っており、古くから土地の人々が厚く信仰されているところです。

文化十二年（１８１５）には、島津重豪公もここに参拝され、その時に寄進をされた灯篭が今でも残っています。

居世神社の名称にも謂れがあり、「こせ」と呼んで、実は「伊勢」ではないかといわれています。平清盛の祖父正盛と父忠盛が伊勢の国守で平家は伊勢の国で出世しました。そのため、伊勢神宮の加護には心から一族信心していました。この居世も、いせと呼べば、源氏落人狩りの発覚の発端となりかねないため、わざと「こせ」といったものではないかと言われています。

安徳天皇の墓といわれる「陵（みささぎ）」

安徳天皇の荼毘所といわれる「小烏（こがらす）神社」